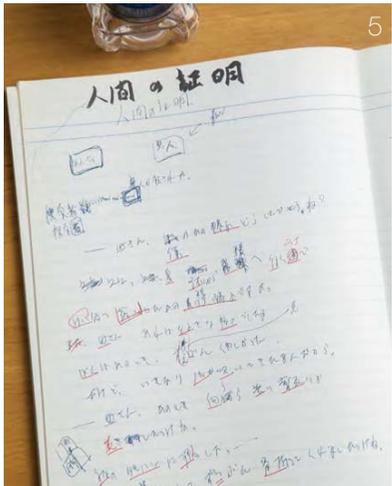


1. 職場での執筆風景 2. 写真と俳句を組み合わせた「写真俳句」の句集やハウツー本の著書も。散歩中に撮影することも多いという  
3. 森村作品の代表作。左から「悪魔の飽食」「人間の証明」「高層の死角」 4. 1977年9月、新宿の紀伊国屋書店で行われた「野性の証明」サイン会 5. 「人間の証明」執筆ノート。「母さん、僕のあの帽子どうしたんでしょうね」という西條八十の詩は映画のキャッチフレーズになった



# 特集 2 森村 誠

## 可能性を追い求める 永遠の狩人

「人間の証明」の大ヒットで知られる作家・森村誠一。

これまで数多くの作品を世に送り出してきた。そのジャンルは推理小説や時代小説、ノンフィクションと多岐に亘り写真俳句にも精力的だ。作家として半世紀を超え執筆意欲は止ることなく今でも彼は途上にあり続ける。



森村 誠一 1933年埼玉県生まれ。青山学院大学卒業後、9年余のホテルマン生活を経て作家活動に入る。「高層の死角」で第15回江戸川乱歩賞、「腐蝕の構造」で第26回日本推理作家協会賞、「人間の証明」で第3回角川小説賞を受賞。2003年には第7回日本ミステリー文学大賞を受賞、社会派推理小説の世界で不動の地位を築く。2011年には「悪道」で第45回吉川英治文学賞を受賞。近著に「南十字星の誓い」、「祈りの証明 3.11の奇跡」など。

読書好きの父をもち、沢山の本や雑誌に囲まれて育った森村誠一。無類の読書少年で、「少年倶楽部」や高垣陣、海野十三、大佛次郎などを読み漁り小説の世界に夢中になるが、太平洋戦争最後の空襲で自宅も宝物だった本も全て失った。焦土と化した我が家の跡に立ち12歳の少年は玉音放送を聞いていた。

戦後も様々なジャンルの本を耽読し、高校時代には元軍医の伯父に偽の診断書を書いてもらい、長期休学して通った町の図書館で『世界文学全集』の読破を試みたという。

作家を目指したのは大学卒業後、ホテルマンの頃だった。職場の斜向かいに文藝春秋の社屋ができ、森村が勤めるホテルを常宿に執筆していた梶山季之や笹沢左保などの人気作家たちに刺激を受けた。名もない労働力の一端に過ぎない虚しさを感じる中で、彼らの生原稿に触れ、作家への夢は大きく膨らんでいった。

作家デビューは1965年。雪代敬太郎というペンネームで書いたエッセイが評判となり、それを再構成した『サラリーマン悪徳セミナー』が最初の著作となった。1969年、知人の勧めで書いた

ミステリー小説『高層の死角』が江戸川乱歩賞を受賞。その後、次々とヒット作を生み出していく。そして、1976年に発表された『人間の証明』で日本を代表する推理小説作家としてその地位を確立した。770万部の大ベストセラーは映画化され、『青春の証明』『野性の証明』へと続き、1981年に発表した『悪魔の飽食』では旧日本軍731部隊の実態を明らかにし社会問題にもなった。

厚木から町田に仕事を移したのは1991年。以来、30年近く町田の地から多くの作品を世に送り出した。閑静で文化的な街もお気に入り、近くには行きつけの珈琲店もある。文学館の創設にあたり、2002年から翌年にかけて開設準備懇談会委員長として尽力。その後も企画展や写真俳句コンテストの開催に関わり、資料を寄贈するなど町田愛も溢れる。

2015年に作家生活50周年を迎えた森村氏。50周年記念作品として圧倒的なスケールの大河roman『運命の花びら』は通算398冊目で、著作は現在400冊を超えた。ゴールのない作家という人生の中で、原稿用紙にペンを走らせる日々は今も続いている。